



鹿児島日英協会 ニュースレター
**The Japan British Society of
 Kagoshima Newsletter**

第 18 号

No.18 March 2023

会長あいさつ ～ニュースレター第18号発行に寄せて～

鹿児島日英協会 会長 島津 公保

会員の皆様、日頃から当協会の運営に様々にご協力をいただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。

コロナ禍は続いています、最近ではコロナウイルスを闇雲に恐れることなく、With コロナを受け入れる状況になってきました。今年は、様々な分野で活動の幅を少しでも広げられればと思います。

昨年は、当協会の創立30周年を記念して久し振りに英国大使をお招きしての講演会と交流会を開催しました。ジュリア・ロングボトム大使には、日英の繋がり歴史から現代の両国関係、これからの更なる交流深化への期待を語っていただきました。淀みのない日本語による1時間のご講演にすっかり聞き入ってしまいました。その後の交流会では下鶴市長はじめ多くの会員や鹿児島で英語教師として活躍している若い英国出身者たちと直接話あっていただき、懇親を深め、参加した皆さんには大変喜んでいただきました。翌日には、塩田知事を表敬訪問し、県と英国との交流について話し合いが行われました。

また、6回目となったエッセイコンテストにおいては、応募点数53点、これまでの最多となり、参加学校数も増えて、幅広い作品が集まりました。コロナ禍の中、高校生は、英国への憧れを書いている作品が多かったのですが、いつの日か皆さんが憧れの地を踏めることをお祈りしています。

英国はここ数年大きな変革に迫られているようです。欧州連合から離脱した Brexit、女王陛下のご逝去、新国王陛下のご即位、首相の短期での交代等、これまでにない試練に見舞われているようにも思います。これまでにいくつもの苦難を乗り越えてきた長い伝統を持つ英国が、チャールズ三世新国王陛下を象徴とする新しい英国として更に繁栄していかれることを期待しています。

これからも様々に学び合いながら、両国の交流に資する活動を続けて参ります。会員の皆様には、一層のご支援を宜しくお願い申し上げます。

目次

- ① 令和4年度 第31回鹿児島日英協会総会報告P.2
- 令和4年度 第1回理事会報告P.2
- 令和4年度 第1回講演会の報告P.2
- エッセイコンテスト・フォトコンテスト表彰式報告P.2
- ② 第6回エッセイコンテスト受賞作品紹介P.3-6
- ④ R4年度薩摩スチューデント派遣事業報告会主催の報告P.6-7
- ⑤ 今後のイベント予定P.7
- ⑥ 協会HPのバナー広告募集P.7
- ⑦ イギリスひとくちメモP.8

① 令和4年度 第31回 鹿児島日英協会総会の報告

日時：令和4年10月23日（日）
会場：ホテルレクストン鹿児島

先日令和4年度第31回鹿児島日英協会総会が開催され、当協会の令和3年度（令和3年10月1日～令和4年9月30日）の事業報告及び決算（案）、令和4年度（令和4年10月1日～令和5年9月30日）の事業計画及び予算（案）、役員改選について審議、了承されました。



（総会にて挨拶をする島津会長）

令和4年度 第1回 理事会の報告

日時：令和3年10月23日（日）
会場：ホテルレクストン鹿児島

第31回総会に先立ち令和4年度第1回鹿児島日英協会理事会が開かれ、当協会の令和3年度（令和3年10月1日～令和4年9月30日）の事業報告及び決算（案）、令和4年度（令和4年10月1日～令和5年9月30日）の事業計画及び予算（案）役員改選を審議、総会に付議することを決議しました。



（第1回理事会の様子）

令和4年度 第1回 講演会の報告

日時：令和3年10月23日（日）
会場：ホテルレクストン鹿児島

第31回総会終了後、ジュリア・ロングボトム駐日英国大使をお招きして講演会を開催しました。講演会後は下鶴鹿児島市長や当協会員、県下のALTの方々、鹿児島在住のイギリスの皆さんと交流を深めました。ご来場の皆様ありがとうございました。



エッセイコンテスト表彰式の報告

理事会終了後、エッセイコンテスト表彰式を行いました。古木副会長ならびに酒瀬川理事が講評し、和やかな雰囲気の中滞りなく行われました。受賞されたみなさま誠におめでとうございます。

○ 鹿児島日英協会主催 第6回 エッセイコンテスト受賞者

〈英語の部〉・最優秀賞：林 瑠璃果 様

・優秀賞：長友 美旺 様 / 末吉 美花 様

・奨励賞：山内 貴伸 様 / 田邊 龍之介 様 / 西村 花凜 様

〈日本語の部〉・最優秀賞：藤崎 慶子 様

・奨励賞：中村 小雪 様 / 平田 好夏 様



英語の部 最優秀賞 受賞作品

鹿児島純心女子短期大学 林 瑠璃果 様 作

“Satsuma Student from the 21st Century”

Ka-boom! In the middle of the summer of 1863, the sound of cannons resounded in Kagoshima Bay. Triggered by the murder and wounding of some British nationals who disturbed the daimyo procession, the Satsuma clan went to war with the British Empire. Despite the large disparity in weapon performance, the Satsuma clan succeeded in repelling the British fleet from Kagoshima Bay. After the war, both sides sat at the negotiating table, and the discussion served as a starting point for deeper exchanges between the British and the Satsuma domain. Two years after the end of the war, the Satsuma clan sent 19 people to Britain. They were called the Satsuma students and after returning to Japan, they made use of the knowledge and experience they had gained while studying abroad to contribute to the modernization of Japan, becoming interpreters, diplomats and businessmen, among other things.

In October of 2020, I moved to Kagoshima with my mother. I was planning to go to an overseas university, so I decided to spend time with my grandparents before I left Japan. However, I could not study abroad due to COVID-19 and I was devastated. I felt like my future was closed, but I was lucky enough to be able to enroll in a college where I could study English in Kagoshima. Through my classes at college, I learned that Kagoshima has historically had strong ties with other countries. The history of Kagoshima is too long to tell here, but I was particularly impressed by the Satsuma students who had been looking overseas and had actually studied abroad more than 150 years ago. For me, Kagoshima is my second home. This was because I often visited Kagoshima to see my grandparents. I was deeply moved that a place with such a special feeling had produced people who contributed to the modernization of Japan. When I learned about them, I thought about whether I felt that I wanted to contribute to Japan or not when I decided to study abroad. In fact, I realized that I wasn't thinking about that at all, and that I was aiming to study abroad just to do what I wanted to do. After that, for some reason, I felt very embarrassed about my reasons.

After realizing that I had only a self-centered way of thinking, I researched the Satsuma students more in order to know what studying abroad originally entailed. I believe

that the purpose of studying overseas is not only to learn languages, but also to expand knowledge of multiculturalism and break old ways of thinking. The reason why 19 people from the Satsuma domain went to the British Empire was also to update the old Japanese system by introducing Western technology and to raise Japan's national power from various aspects such as politics, military power and industry. The people of Satsuma had realized already 150 years ago that in order for Japan to compete with the rest of the world, it needed to get out of its shell and dare to learn from other countries. In modern times, there are more individual choices than in the past, and it is easier to go abroad now, so people today will not feel the heavy responsibility that the Satsuma students shouldered at that time, but if we can contribute to the development of the country and region where we were born and raised by outputting the experience and knowledge we input by studying abroad, it will be in response to their voices from the Edo period.

I am proud that I have moved to Kagoshima, the land of Satsuma, and that I am able to study in Kagoshima. I am also impressed that Kagoshima and Britain have overcome their feud and have maintained relationships from the Edo period to the present. Two years ago, I felt as if my future was closed due to the Corona virus, but knowing about the Satsuma students strengthened my desire to study abroad again. Besides, I understand the significance of studying overseas more than before, and I want to become a person who can contribute to the local community and the country like our predecessors of 150 years ago. I have not yet clearly decided what kind of job I want to get in the future, but I want to be involved in a job that connects Japan with overseas. In order to do that, I would like to study economics and politics at a university in the UK and I also want to contribute to Kagoshima, my second home by using my knowledge and experiences from studying abroad in a practical way. I would be delighted if I could be a Satsuma student in the 21st century.

日本語の部 優秀賞受賞作品

鹿児島中央高校教諭 藤崎 慶子 様 作

「女王様とお茶を!？」

”Behave yourself, or you will miss the chance to have tea with the queen!”

「お行儀よくしなさい。そうしなければ女王様とお茶を飲むチャンスを逃しますよ！」

公園のベンチで、私の横に座っていた年配のご婦人が、お孫さんらしき女の子に向かって叫んだ。19年前、プリマスに滞在していたある昼下がりの公園での出来事である。大声を上げながらスカートを翻し、縦横無尽に公園を走り回っていた少女は、ピンク色のワンピースきまり悪そうに整え、ベンチに

急いで戻りそのご婦人の横にちょこんと座った。

なんとも微笑ましい、そしてイギリスを象徴する場面としてわたしの脳裏に焼き付いている。お孫さんをたしなめる言葉の中に「クイーン」と「紅茶」という、イギリスの歴史や文化を語る時に欠かせない言葉が入っていたことに驚きを感じたと同時に、約1000年の歴史を持つイギリス王室の国民への影響力の大きさを実感した瞬間でもあった。「女王様とお茶を飲む機会が無くなるなんて大変だわ!!」と慌てて自分の居住まいを正す小さな女の子、なんともチャーミングなその行動に微笑まずにはいられなかった。



1702年に女王に即位したアン女王は専用の茶室まで所有した女王であり、1837年に即位したヴィクトリア女王は、アフタヌーンティーを公式な場とした。イギリスの歴史のみならず紅茶の歴史もまた女王様とは切り離せない繋がりがある。私はこれまで、イギリスのご家庭にホームステイさせていただく機会が度々あったが、それぞれの家庭にそれぞれのティータイムと紅茶の飲み方の流儀があるということを感じかされた。またそれがイギリスの寛容さであり豊かさでもあると感じている。

私が初めてイギリスを訪れたのは、今から30年以上前に遡る。当時大学4年生だった私は、卒業旅行を兼ねてイギリスに1か月滞在した。当時、3人の男の子（4歳の男の子と1歳半の双子の男の子）を持つ20代の若いご夫婦の家にお世話になりながら語学学校に通った。3人の子供の子育ては毎日が戦争でてんやわんやという感じだったが、そんな多忙な毎日の中でも、夕食後のティータイムは、その日あった出来事を語り合う家族の大切な時間として位置づけられていた。大きなマグカップにたっぷり注がれたミルクティーと一緒に、子供たちの大好きなチョコバーが必ず出てきた。子供たちは砂糖を入れた甘いミルクティーを飲み、大人はほとんど砂糖を入れずに飲んでいと記憶している。ある夜、“さあ、今日ぐらいいはミルクティーを私がいれよう”と、張り切って台所に立った私だったが……。私のミルクティーを飲むやいなやホストファザーのトーマスがなんとも複雑な表情で“Didn't you pour milk first?(ミルクを先に注がなかったのかい?)”と尋ねた。“No, I didn't pour milk first, I poured tea first. (いいえ、ミルクではなく紅茶を先に入れました。)”と答えると、トーマスはニヤツとした表情で、“No, milk comes first.”と言って、私を台所へ連れていき、ミルクティーの作り方を懇切丁寧に教えてくれた。「混ぜれば同じではないのか?」という私の浅はかな考えは、何百年もの紅茶の歴史を持つイギリス人の誇り高き舌にはすぐに見破られ、打ち砕かれたのであった。それ以来、教材にイギリスの歴史や紅茶についての内容が出てくるたびに、この苦い失敗談を30年以上生徒の前で語ることとなった。



19年前にお世話になったプリマスのバーバラは、毎週末、港を見下ろすオープンカフェに連れて行ってくれた。必ずミルクティーとクロテッドクリームとジャムをたっぷりのせたスコーンを注文した。私たち二人にいつも同行した愛犬のモーガン（エアデールテリア）が物欲しそうにテーブルの下から私たちを見つめる。彼女はロイヤルファミリーの話題が大好きで、マグカップを片手に、エリザベス女王のお召し物と帽子のつり合いの話や、チャールズ皇太子とダイアナ妃のご成婚の際、寝袋を抱えてロンドンへ行き、ベストポジションを陣取った話など、とても楽しそうに饒舌に話すのだ。まるで、ロイヤルファミリーが身内であるかのように。

もしかするとイギリスの人々は、「いつか女王様とお茶を飲む日」が訪れるのかもしれない・・・と思いながらそれぞれの家庭のティータイムの流儀を確立し、それを楽しんでいるのかもしれない。いや大真面目にそんなことを考えていないとしても、心のどこかで女王様の姿を思い浮かべつつ、自分もお茶をご一緒させていただいている気分になって、その至福の時間を楽しんでいるのかもしれない。



プリマスにて (バーバラの家族とのティータイム)

④ 鹿児島日英協会主催 薩摩スチューデント派遣事業報告会報告

令和4年度、鹿児島県が行った「薩摩スチューデント派遣事業」に参加した3名の高校生との報告会を行いました。今年も昨年に引き続き、コロナの影響で英国へ行くことは出来ず、オンラインによる「UCL-Japan Youth Challenge 2022」に登録参加したものでした。

日時 令和4年1月29日(日) 15:00 会場 ホテルレクストン鹿児島

発表者	鶴丸高校	2年 坂元 愛実 さん 「薩摩スチューデントとしてのこれからの私」
	玉龍高校	1年 寄野 魁晟 さん 「薩摩スチューデント派遣事業への参加を通じて体験したこと、成長したこと」
	鶴丸高校	2年 岸田 想咲 「英語と英国流合理的判断で切り開く未来」

三人とも明確な将来の目標やビジョンを持ち、そこまでの道筋も描いておられ、プレゼンのスキルも社会人顔負けの立派なレポートでした。様々な質疑応答にも臨機応変に答え、鹿児島の未来を担おうというたくましさを感じました。鹿児島日英協会の古木副会長は以下のようにコメントしました。

古木副会長の感想 (一部抜粋)

本日は素晴らしい高校生たちの報告会を有難うございました。我々はややもすると「今の若者は」と批判的ですが、今日の3名を見ていて、将来の日本を背負っていく人材がいることを知りました。

我々、大人も「今ごろの大人は」と言われたいようにしたいと思いました。この若者たちに期待したいと思います。また県の方々にも感謝したいと思います。今年は実際に英国に行き生での体験ができると信じています。その報告も楽しみにしています。

県による「薩摩スチューデント派遣事業」の概要説明

● 目的

友好協定先の英国ロンドン・カムデン区にあるユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)がオンラインで実施する「UCL-Japan Youth Challenge 2022」に本県高校生を参加させることでグローバルに活躍する人材の育成を図る。

(参考) H30年度・R元年度の薩摩スチューデント派遣事業においては、英国に高校生を派遣し、友好協定を締結しているカムデン区・マンチェスター市との交流やロンドンにあるUCLで開催された「UCL-Japan Youth Challenge」に参加したが、2022年度は同プログラムがオンラインで実施されることとなった。

● 内容

UCL-Japan Youth Challenge 2022への参加及び活動報告

- UCL講師陣による講義・ワークショップ
- 専門の研究者等との意見交換
- UCL Grand Challenge Workshop など

主催はUCL-Japan Youth Challenge実行委員会。講義はZoomを利用してオンライン形式で実施

＝下の写真は薩摩スチューデント派遣事業報告会の様子＝



⑤ 今後のイベント予定 (コロナウイルス拡大防止のため、中止・延期となる事業があります。)

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 1. 第3回 Pub Quiz (青年部主催) | 開催時期未定 |
| 2. 令和4年度第2回理事会・講演会 | 2023年3月19日(日) |
| 3. 令和5年度第32回鹿児島日英協会総会・講演会・第1回理事会 | 2023年10月末予定 |
| 4. 第7回エッセイコンテスト | 2023年7月末日締め切り |
| 5. イギリス視察ツアー(仮) | 実施時期未定 |

※コロナ禍ではありますが感染状況をみながら可能なイベントを考えたいと思います。ご提案、ご要望をお待ちしております。

⑥ 協会HPのバナー広告を優先してご紹介・募集いたします。

令和3年度事業として報告いたしました。鹿児島日英協会のホームページをリニューアルしました。それに伴い会員様を優先して、当協会HP上でのバナー広告を募集いたします。皆様の企業情報などを日本国内の日英協会など国内外の関係者に発信されませんか。

各バナーにつき1年契約(契約後は自動更新可)で3万円(税込)となります。ご入用の際は事務局にお尋ねください。



<http://jbsk.jp/>



⑦ イギリスひとくちメモ

“英国王のクリスマスメッセージ”

70年にわたって君臨したエリザベス女王亡き後、チャールズ国王初めてのクリスマスメッセージ (Royal Christmas Message) が昨年12月25日に放送された。今やクリスマスの重要な位置を占める伝統のこのメッセージ、1932年に曾祖父ジョージ五世がBBCのラジオ放送を通じて発したのが始まりだ。最初の原稿はノーベル文学賞作家のラドヤード・キップリングによるもので、技術の進展、平和、繁栄などに言及した。対象は始め大英帝国国民へのものであったが、その後イギリス連邦 (Commonwealth of Nations) へと拡大された。当初はライブ、後に録画で放送され、媒体もBBCのラジオ、テレビ (1957年開始、1997年以降は民放のITN、2011年以降はSky Newsもローテーションで放送) から、インターネット、3D配信までと広がった。

以来、祖父ジョージ六世、母エリザベス女王へと引き継がれ、ほぼ毎年放送されてきた。女王即位後しばらくまでは家族でクリスマス休暇を過ごすノーフォーク北部の離宮サンドリンガムハウスから、後にはバッキンガム宮殿やウィンザー城、ハンプトンコートなどからも放送されてきた。放送がなかったのは、大伯父エドワード八世が1年足らずで退位した1936年、まだメッセージが定着していなかったジョージ六世治下の1938年。それと、夏にチャールズ皇太子の立太子式に関し特別なドキュメンタリー映画 ‘Royal Family’ が放映され、クリスマスにも再放送が予定されていたため、過度の露出を避け文書でのメッセージだけとなった1969年の3年だけである。

今では国歌演奏に続き放送されるこれらのメッセージの内容はその年々の世界の出来事や時事問題、歴史の教訓、英国ならびに英連邦で国防や社会福祉などに奉仕する人々、各界で活躍する人々への敬意と感謝、日々の生活に苦悩する人々への労り、平和への希求、聖書の言葉への言及など多岐に亘る。女王の時代になると政府のアドヴァイスに基づいて準備される他の公的なスピーチとは異なり、内容は女王自らによって決められ、世界平和や人種・人権問題などに加えて王室内部の慶事や弔事、聖書、キリストなどへの言及も増えた。個人的にはチャールズ皇太子の挙式 (1981) や、ウィンザー城の火災 (1992)、ダイアナ王妃の葬儀 (1997) の年などの、感情を抑えた、それでいて周りの人々への感謝と敬意に満ちた表現や、毎年の聖書やキリストへの謙虚な言及などが心に残る。

昨年のチャールズ国王初めてのメッセージでは母君エリザベス女王への敬意と女王の逝去を悼んでくれた人々への感謝、生活に苦しむ人々への労り、様々な苦境に立つ人々を支えるボランティアや教員、医療福祉関係者などの私心なき献身への敬意などを表明、人々の心に残るものとなった。

筆者も毎年欠かさず、この伝統あるスピーチを楽しみに視聴してきた。このメッセージがいつまでも人々の心に寄り添い、癒しや励みになることを願ってやまない。
(鹿児島日英協会理事・志学館大学名誉教授 酒瀬川純行)



ウィンザー城

“I am standing here in this exquisite chapel of St George at Windsor Castle, so close to where my beloved mother, the late Queen is laid to rest with my dear father.

“I am reminded of the deeply touching letters, cards and messages which so many of you have sent my wife and myself and I cannot thank you enough for the love and sympathy you have shown our whole family.

...

“With all my heart, I wish each of you a Christmas of peace, happiness and everlasting light.”

国王チャールズ三世のメッセージの冒頭と結びの言葉



バッキンガム宮殿

★鹿児島日英協会URL :

<http://jbsk.jp/>

★鹿児島日英協会青年部 Facebook :

Japan British Society of
Kagoshima Youth Division



【鹿児島日英協会事務局】

〒892-0871

鹿児島市吉野町9700-1 (株式会社島津興業内)

TEL : 099-247-7000 (代表)

FAX : 099-247-9539

E m a i l : jbskagoshima@yahoo.co.jp